Photographic Society of
Zone System

ゾーンシステム研究会会報　Web 公開版
発行日：2012.7
発行者：中島秀雄
事務局：畑　文夫
編集部：荒井　崇

NO.51

CONTENTS

・病院に写真ギャラリーをつくる
・古典はあたらしい ---- 河野和典氏講演
・インフォメーション

病院に写真ギャラリーをつくる

中島秀雄

先ごろ、JPS(日本写真家協会)が主催する ”世界のフォトシーン、その現状とは”と称したセミナーが開かれた。

講師は医師の杉山武毅氏。杉山医師は、神戸大学医学部を卒業し、現在、市立西脇病院に勤務する。7 歳まで父親の仕事の関係でアメリカのシカゴで生活し、幼い頃、美術教育の中で写真を経験してきた。

医師は医療の中心にいて、患者は病院の中心にいていつも不満を持っている。

杉山医師は、医療環境の質を向上させたいという思いから、停滞する病院に新しい価値を創設するための病院力プロジェクトを立ち上げ、社会の視点を通じた写真文化を病院に取り入れる運動を進めてきた。病院空間に本格的なアート写真を展示し、患者、家族、スタッフにどのような影響を与えるのか臨床研究を提案してきている。

普段は、医師として主に悪性腫瘍に対する外科手術に腕を振るう傍ら、医療現場やアート、メディア、言論の荒廃に危機感を抱き、近年、停滞する病院に新しい価値を創成するための仲間と共に発言を続け、自らも神戸にギャラリーを開設し、国内外の写真家を招聘するなどユニークなアート活動を行ってきている。

また、写真文化、写真を取り巻く環境などの研修及び取材のために、フランスのアルル国際写真フェスティバル、アメリカのサンタフェ・フォト・フェスティバルに出向き、写真が果たす役割や、一般の人々が写真に対して抱く思い、日本の写真文化との違いなどを通して学んできたことの話が中心となった。(スライドを交え 1 時間程の話になった)

ここで、講演内容のすべて書くことは出来ないが、まとめてみると、

- 東京のギャラリーは敷居が高い。
- 写真文化、アート、ユーザー、消費者とは誰なのか。
- 日本の写真アート環境は閉鎖的すぎる。
- 写真表現の内容に受け入れ範囲が狭い。
- 日本の写真教育は技術が中心、アメリカは、写真家が教師となっている。
- 体系的理論的な根拠による写真評価がない。
- 写真活動が閉鎖的、局地的。
  マーケットがない。
- アメリカやヨーロッパは、アマチュアとプロを区別している。
- 若い日本人も海外フォトレビューに参加が増えている。
- 海外の写真審査員は多彩で、審査の過程で写真家に合うギャラリーを責任で紹介する。

アメリカやヨーロッパの写真文化をすぐに日本に根付かせることは出来ない。

しかし、海外の写真フェスティバルやイベントを数多く取材を通して写真アートが果たす役割に可能性を強くし、医療とアートとの橋渡しから双方の価値の交換が可能かを実証する ART in HOSPITAL を主宰してきた。そして、一流のアート作品を病院空間に持ち込み、一般の人々のアートに対するまなざしを訴求し、写真アートから受ける意味を医師、看護師、患者、外来者と共有することで病院のコミュニケーションをはかり患者への治療にも役立てたい。また、アートに介在する人々の閉鎖性を指摘し、アーティストの高い意識での社会参加を促す活動をこれから続けていくという。(JPS 資料参照)

私が住む近所の個人病院には、花を得意とする有名な写真家のサイン入り写真が数点展示してある。長い待ち時間にはいつも眺めていた。また、掛りつけの総合病院には、どう見ても病院が積極的に購入したとは思えない油絵がロビーにかかっている。退院した患者がお礼に寄付した作品なのだろう。反対側の壁にはカラー写真の付いたカレンダーが掛けられ、印刷もきれいで見ていて安心できるときもある。

近年、医薬品の開発や高度の医療技術に伴い、病院に対する治療そのものは格段に上がっている。しかしその一方で様々な問題も起きている。医師不足、長期入院、医師・患者の対立、医療費高騰等。それらの中には、制度や経済の問題だけでは解決できないものもあるように感じる。アメリカには診療内科が多くあり、一般市民のちょっとした気分変化やストレスをケアする担当医師が多いと聞いたことがある。病院が単に薬や手術による治療だけではなく、心や精神の安定を促すような環境を併設する発想の転換が求められているように思えてならない。

今後、アート作品が美術館やギャラリーだけに留めておくだけではなく、病院、学校、役所、駅のような不特定多数の人達が集まる空間にこそ必要と思えるが、その環境は必ずしも十分に整っているとは言えない。その場合、環境によっては高度の印刷プリントが適している場合もあるし、オリジナル作品を展示する方が適している場合もあり、大きなうねりとなって進むことを願うばかりだ。

杉山医師が構想する Hospital Photo Gallery が、新たな病院力の大きな役割を担う一つの方向であってほしい。

最後に、杉山氏は、国立写真美術館、国立写真大学の必要性を強く語り、終了した。

古典はあたらしい ----
河野和典氏講演

（研究会総会での講演会）

浜野次郎

・日時：2011 年 2 月 11 日（土）15ー17 時
・会場：文京シビックセンター区民会議室

研究会恒例のセミナー、今年は日本カメラ元編集長の河野和典氏をお招きした。講演のテーマは三つ、

1. アンセル・アダムスとゾーン・システム
2. 2011 年の印象にのこる写真展
3. 我が師匠　新川幸信

河野氏は雑誌編集のかたわら、各地でおこなわれる写真展を幅広く見てこられ、現在は写真界全体の動きを後世に残す「写真年鑑」を編集-制作-発行されている。1. 2. はそのなかからの貴重なコメント。

3. は 1973 年に亡くなられた新川幸信氏の思い出。稀代のライターを通して 1960ー70 年代写真誌の全盛時代を証言する大変興味深い講演でした。

1. アンセル・アダムスとゾーンシステム

アダムスの作品には 1993 年新宿小田急百貨店と 1999 年川崎市民ミュージアムにて開催された展覧会（アンセル・アダムスの世界）ではじめて目にした。この展覧会にあわせて写真集「クラシック・イメージ」が発行された。アダムスといえば風景写真が著名だが、人物写真や建築写真にも出色のものがある。豊かな階調のなかにどっしりとした風格がある。ポラロイドの世界（日本カメラ社刊）の中の作品も美しい。

紹介された作品：「モニュメントヴァレーにおけるセルフポートレート 1958」「ジョージア・オキーフとオーヴィル・コックス 1937」「アルフレッド・スティーグリッツとジョージア・オキーフの絵画 1944」「ホセ・クレメント・オロスコ 1933」「ニューメキシコ 聖フランシス教会 1929」など

アダムスの言葉

アダムスは「未来に向かって我々は新しい技術の恩恵を自らのものとし、利用しなければならない。そして思考と感覚のあらたな道を探らなければならない。」と語り、プリントの乾燥に電子レンジをもちいるなど、新しい科学技術をどん欲に取り入れた。（このことは植田正治氏にも共通する）

一方で、写真があまりにもオートマティックにつくられることにも警鐘をならしている。

「写真というものがほんとうに字義通りむずかしいものであったら、つまり 1 枚の写真を撮るのにすぐれた水彩画やエッチングの制作に要するほどの時間と労力がいるのであったら、写真作品の質的向上はめざましかっただろうと思うことがある。」

誰が撮っても平均的に撮れるカメラ技術

この言葉に関連して思うのは、カメラの進化がすぐれた写真を生む結果に必ずしも結びつかないこと。ミノルタ α-7000 のオートフォーカスや、第 1 回のカメラグランプリをとったニコン FA の多分割測光（アダムスのゾーンシステム的な解析をカメラの側がやってくれる露光システム）は画期的なシステムだったが、日本カメラ社に持ち込まれる写真を見ているとこれらが開発されて以降、むしろ抜きんでた作品がなくなってしまった。

2. 2011 年の印象にのこる写真展

昨年行われた多くの写真展のなかで、下記のふたつ（いずれも東京都写真美術館）が最も印象深

かった。

芸術写真の精華---日本のピクトリアリズム展
（３月８日ー５月８日）

金子隆一氏による長年の研究の集大成。はじめてみる作品が多く、とても新鮮であった。
紹介された作品:高山正隆「楽器をもつ女 1924」、/黒川翠山「題不詳 1906 年頃」/永江博「ヌード 1921」/福原信三「広告板 1913ー1921」/福原露草「題不詳（椅子)」、「権現堤 1936」/野島康三「柳宗悦氏 1923」/吉川富三「小村直太郎君 1923」/野島康三「枇杷 1930」/高山正隆「風景 1930」/梅坂鶯里「芍薬 1931」/岩佐康夫「屋根 1930」/福原信三「西湖風景より 1931」/福原信三「ヘルン旧居 1935」など。

勤務していた日本カメラ社の人形町の路地の奥には吉川富三や野島康三の仕事場があったのを懐かしく思い出す。山陰の作家たちはプリント時に画像を湾曲させたり、ソフトフォーカスにしたり、独特のテクニックを駆使してシュールな雰囲気を生んでいる。すばらしい写真に触れ、自分でも写真を撮ってみたいと触発させられた。

ストリートライフ・・
ヨーロッパの７人の写真家展
（2011 年 12 月 10 日ー2012 年 1 月 29 日）

はじめて紹介される写真家が多くたいへん興味深かった。

・ジョン・トムソン THOMSON,John…当時出版された写真集をばらして展示、当時の美術印刷技術（ウッドベリータイプ）も見事。紹介された作品：Street life in London 1877 より「コヴェントガーデンの花売り」「ウエストミンスターの招集された兵士」「看板屋のポトレート」「魚屋」など

・トーマス・アナン ANNAN,Thomas…イギリス版アジェといった作風。大判の印刷物を展示。グラスゴーの街のたたずまいを克明に撮った非常にシャープな作品。紹介された作品：「交差点からみるハイストリート」「古い小径、ハイストリートの裏通り」「袋小路 101 番」など

・アジェ ATGET,Jean Eugène Auguste…鶏卵紙の作品 32 点が美しく見応えがあった。パリのアウトサイダー、たとえば物売りやスラムのような風景、建築物を克明に撮っている。紹介された作品：「キャバレー金の十字架」「石膏売り」「階段のたたずまい」など。

・ブラッサイ BRASSAÏ…写真集「夜のパリ PARIS NUIT」が多くの写真家に影響を与えた。紹介された作品：「エッフェル塔」「広告塔」など。

・他に風刺漫画家ツィレ、アウグスト・ザンダーの作品が展示された。

古典的なものは今みても新鮮、全自動カメラの世の中でこんな写真を改めて撮るのも良いと感じた。当時のプリントはすばらしくうつくしい。

3. 我が師匠　新川幸信

写真界ですごして 40 年、私が出会ったすばらしくユニークな人物を紹介したい。

新川幸信（しんかわこうしん、ゆきのぶ 本名：義信 1931-1986）

メカニズムライター。浅草生まれ。東京大学経済学部を中退後、東京写真短期大学を卒業。1960 年代から 1970 年代にかけ日本のカメラ業界の興隆期に「カメラ毎日」「アサヒカメラ」「日本カメラ」の各誌において毎月連載。先見性と理論的なメカニズム解説に定評があった。著書に「よい写真へのアドバイス」「カメラバイブル」など。

師匠との出会い

1970年に日本カメラに入社し､カメラ年鑑1972年版において新川氏が書いた記事を読んだ。これからの一眼レフカメラの進化の方向を「TEM=TTL,EE,MOTOR DRIVE」という言葉で表現したこの人はすごい！と感じて会いに行った。当時板橋区大山の木造アパートにお住まいだった。

新川氏には「編集者とはなにか」を教えられた。またよく飲みにもつれていってもらった。毎日お酒を飲み、べろべろに酩酊してしまうが、あまりにも話がおもしろいのでよくお付き合いした。

氏から教わった事で一番心に響いたのは「絶対知ったかぶりはするなよ！」という言葉。自分は知っているつもりになっていても本当のことは誰も知らない。編集者というものはいろいろな写真家との接点をもつので、いろいろな風聞を耳にする立場であることを気遣ったサジェスチョンであったと感じる。

すべての写真は自画像

新川氏が残した千葉の写真クラブへの寄稿文から--

「写真の技術はカメラメカニズムの進歩によって、かつての人達に課せられたものの何分の一かに減少している。“写る”という点では、経験はもうまったく必要ない。（略）何を、どのように撮るか、そこの作者の考え方、もっと端的には生きざまが現われるはずだ。いうならば、全ての写真は自画像でしかない。だから“写真を教える”ことはあり得ない」

写真は自分を表すことに他ならない。自動露出もなくフィルム感度も低い時代にすごい作品が生まれてくる一方で、メカニズムの進歩によって写真が安易にながれ、かえって作れなくなるという悲しい現実がある。マニュアルでカメラを操作する時間は「ものを見つめる時間」として必要なのではないか。

チャップリンとガンジーが出会い、「人間が機械に使われるようになったらおしまい」ということで意気投合したというエピソードを思い起こす。

激務のなかで

メカニズムライターは原稿を書くのと同時に、カメラを物撮りし、さらにそのカメラで撮った写真を仕上げなければならない。ワープロの一号機を導入するなど、合理的な仕事の進め方はしておられたが、端から見ても大丈夫かなと思わせるほどの激務であった。

実兄が医師であったにもかかわらず、絶交状態。浅草国際劇場の九条映子を寺山修司に奪われ生涯独身。酒量も多く、高血圧であったにもかかわらず医者にもかからず、最後は東上野のアパートで孤独な死（急性くも膜下出血）を迎える。破天荒な最期であったが、それも新川さんらしかったと思う。

質疑応答

Q. 新川さんの撮影した写真はあるのか、どんな作品を撮ったのか。

A. 劇団の写真、浅草のまちの街頭スナップが代表的。一時作品を預かっていたことがあったが勝手に発表するわけにゆかないので写真は遺族にお返しした。カメラは最初ニコン、その後キヤノン。80年代にはコンタックスを愛用した。カメラメーカーの設計者や広報の方たちとは長くつきあっていた。カメラに関しては1985年初のオートフォーカス一眼レフ、ミノルタのα-7000が登場したときに「カメラの一大革命」として大阪まで社長インタビューをしに行ったことが思い出深い。

Q.「写真を教えることはできない」ということの意味は？。
A. 写真のテクニックは教えることはできても、本質的に写真は人のまねでは出来ないということだと思う。

Q. カメラ雑誌の月例コンテストについてどう考えておられるか。審査員の好みにあわせて写真を撮るという人もいると思うが。
A. 写真の楽しみの導入部としてやっている。技術を磨く意味でも他の人の作品を見て学ぶという効果は大きい。また紙面に載るということの喜びは大きい。月例の年度賞をとる人はそれなりのストックをつくって応募している。そのエネルギーは大変なものがある。デザイナーが撮った新しい発想の作品など、月例作品のなかで今でも思い出す作品もある。見たこともない作品が出てくる楽しみがある。
審査員によってどんな作品をとるかは様々。江成常夫氏は作家をめざす若い写真家には月例への投稿はすすめなかった。若いころ応募していた植田正治氏も自分が教えている人には応募するなと言っていた。
1960ー70 年代はすごい時代で、カメラ雑誌もこれぞという新人に光をあてる、海外の作品を紹介するなど、毎月何が出てくるか楽しみだった。植物写真のハウツー特集に牧野富太郎の原稿が載るなど、当時は実質的に写真誌。今は名実ともにメカニズム紹介だけのカメラ雑誌になってしまった。写真を楽しむ人の数は増えたが、情熱は低下した印象がある。

Q. アナログ銀塩写真にいそしむ我々のような愛好家もいるし、一方では携帯で写真を撮る人も多い。これから写真はどうなってゆくのか。
A. 哲学者クロサキいわく、「今や写真は携帯の時代に移り、カルティエ=ブレッソンのように研ぎ澄ました時間を切り取る時代は去った」。確かに社会一般には写真は空気のようになったといえる。しかし様々な方法は残るだろうし、本日見ていただいたように過去の写真のなかにもすばらしいものがある。写真の魅力を保つためには（小さな規模であっても）新鮮なものを常に開拓し、そこに力を注いでゆく必要がある。時代はめぐる、ということではないか。

古典は新しい

河野和典さんの言葉には対象を包み込むような優しさが感じられる。若き日に薫陶をうけた新川幸信さんとの間にも、ライターと編集者という立場を越えた深い交流があったのだろう。氏の率直な、それでいて柔らかな姿勢の底には新川氏の「絶対に知ったかぶりをするな」という教えが生きていると拝察する。
講演全体を通じて繰り返し強調されていたのは「時代はめぐる」「常に古典は新しい生命力で私たちに語りかけてくる」「写真を将来に残すことの大切さ」という 3 つのことであった。
大判のアナログ写真に取り組んでいると、誰しも時折「非効率きわまりない」「銀塩はやはり時代遅れなのでは」という思いに襲われる。そんな私たちに「過去の人たちはもっと困難な状況で、こんなすばらしい成果を残したのだよ」と励ましていただいたような気がする。「カメラメカニズムの発達はすばらしい。しかし芸術としての作品制作にはほとんど関係ない、むしろ作品の平板化をまねいた」というご指摘も長年月例作品を見続けてきた方の発言だけに重みがある。
さあ、私たちも未来の古典をめざして一歩ずつやってゆきましょう。

Information

［表紙の作品］

・作者：越後久雄
・タイトル：モンスター
・フィルム：KODAK T-MAX400 6x6
・レンズ：50mm
・絞り：f22
・シャッター：1/60 秒
・キーゾーン：雪のハイライト（Ⅷ-Ⅸ）
・ハイライト：雪のハイライト（Ⅷ-Ⅸ）
・印画紙：Rembrant V G2

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［編集部］荒井　崇